アビコとかいう子

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アビコとかいう子

【Ｎコード】
Ｎ６１７５Ｑ

【作者名】
大森ろら

【あらすじ】
恋愛に奔放なわたし、アビコ。友達のカコの彼氏、神楽がある日相談に来た。ひょんな事から神楽と関係を持ってしまったわたしのドライで熱い物語。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。
ｈｔｔｐ：／／ｒｏｒａ．ｉｋｉｄａｎｅ．ｃｏｍ／

友達とかめんどくさい。友達という言葉で他人を縛るやつはもっとめんどくさい。だから村尾カコはすっごいめんどくさい。
「うちら腐れ縁だよね」
ぞっとする。
カコは長い黒髪が自慢の学年のアイドル的存在でわたしはその正反対。
「あのアビコとかいう子ってさぁ」
あのさあ、本人に聞こえるように言うんなら、目の前にきて言えっての。なんなのそれ。目の前に立ってやって「ああ？」って凄んだら「なに？　こわ～い」って、てめえの神経のほうがよっぽどこえぇよ。
「また友達の彼氏寝取ったらしいよ」
そういうのも古いから。なに寝取ったって。おまち！　泥棒ネコ！ってか。ほんと、めんどくさ。
「おまえもメンドクサイよ」
家に帰ったらカコの彼氏が玄関の前で立ってた。
「え？」
玄関の鍵をあけて中にはいって振り返る。ぼうっとわたしのことを見ている神楽の間抜け面にイラっとする。
「なんなの。わたしに用？」
「ああ・・・・・・・うん。ちょっと相談」
はあ。
「いい・・・・・・・かな？」
「ここに来ちゃってんだからしょがないよね」
「ごめん」
靴を脱ぎ捨ててスリッパを履いていると母親がキッチンから顔をのぞかせた。

「おかえり、双葉ちゃん。あら。お友達？」
「うん」
「じゃあお紅茶でももっていくわね」
「あ・・・・・・ああ」
「お邪魔します。神楽といいます」
「神楽君ね。いらっしゃい。あなた、チョコレートケーキはお好き？」
部屋にはいると、鞄を机のうえにおいて、ベッドにジャンピ～ング。スカートがめくれてパンツ見えそうだけどまあ別にいいや。神楽瞬はわたしのこと襲うような度胸なんて持ち合わせてないだろうからな。サッカーバカの優等生。背は高いし、顔もきれいだから、けっこうもてる。でもわたしにしたら全くおもしろみのない男だ。
神楽はもふもふの白いカーペットの上にあぐらをかくと、居心地悪げにうつむいていた。わたしはそんな彼を横目で見る。なんだこいつは。
「相談てなに？」
「あ・・・・・・うん」
神楽はなんだか言いにくそうにしている。わたしは起き上がってベッドから降り、スウェットのズボンをスカートの下にはいて神楽の前であぐらをかいた。部屋の扉がノックされて、「どうぞ」というと母親が顔をのぞかせた。ものすごいエビス顔。
「ここにおいておくからね。神楽君だったかしら？　ゆっくりしていってね」
「あ、はい、すみません」
扉が閉まると、わたしは指先をくいくい曲げた。神楽がケーキと紅茶がのったトレイを指差す。頷くわたし。彼がそれをわたしたちの間に置くと、わたしはどばっと砂糖を紅茶にいれて、かきまぜた。
「へえ」と神楽が声をもらす。
「なに？」
「アビコはダイエットとかしてないんだ？　細いから食べ物とか気

をつかってんのかとおもってた」
「んなもんしてないよ。ダンスしてるから、いくら食べても太らないの」
「あー・・・・・・そういえばダンスしてるんだってね」
わたしが手づかみでチョコレートケーキを食べるのを呆気にとられた顔で神楽は見た。
「相談てなに？」
「あ・・・・・・うん、カコのことなんだけど」
「うん」
「昨日、怒らせちゃってさ」
「へえ」
指先についたチョコレートをなめて、ティッシュペーパーでふいた。神楽は紅茶を一口飲んで、ため息をついた。
「なんで怒らせたの？」
「・・・・・・セックスのことで考え方に違いがあってさ」
吹いた。チョコがちょっと神楽の制服に飛んだ。
「なに、あんたら変な趣味でもあんの？」
「違うよ！」
神楽は慌てて顔を横に振って、そして赤面した。赤面するやつなんて久しぶりに見た。頬がほんとに赤くなるんだな。てか、額まで赤い。へええ。神楽って変なヤツ。
「おれの部屋で、なんていうか、そういう雰囲気になったんだけどさ」
「うん」
「キスしたあと服脱がせようとしたら、カコが嫌がったんでやめたんだ」
「ほう」
つまんない。なんでこんな話、聞かないといけないんだ。電話でもかかってこないかな。
「カコは未経験だから、不安だったみたいでさ。でも、興味もある

みたいで・・・・・・なんか、彼女のなかで闘いが起こってるみたいなんだ」
　ぬふ。
　鼻息が出た。闘いってなんだよ。くだらねーし。ほんとどーでもいいし。まじ興味ねーし。
「彼女、おれが家に送るよって言ったら怒りはじめてさ。セックスさせないカノジョはいやなのかとか叫びだして。おれ、慌てて彼女の口ふさいで」
「そのまま押し倒してやっちゃえばよかったじゃん」
　神楽はうなだれた。そしておもいつめたような目でわたしのことをじっと見た。
「おれ、アビコにだけは本当のこと言うわ」
「なに？」
「童貞なんだ」
「え」
「おれ、童貞なんだ。セックス、したことない」
　あー。
　なるほどね。まあ、別に驚くほどのことじゃない。神楽は遊び人てタイプじゃないし、まだ十七だし全然不思議じゃない。カノジョはカコがはじめてじゃないだろうし、キスは何度も経験済みなんだろうけど、最後まではいったことがないわけだ。そうかそうか。
「おれがうまくカコをその気にさせられないのは、経験がないからじゃないかとおもってさ」
　わたしは紅茶を飲み干して、右手を伸ばした。指先は神楽の顎にふれた。神楽はびくっと震えた。でも身をひきはしなかった。
「なるほど。そういうわけか」
「・・・・・・え」
「経験したいんでしょ？　別にいいよ。相手になったげる」
　立ち上がると、トレイをまたいで神楽の肩に両手をおき、そっと押し倒した。彼に馬乗りになり、彼の髪をそっと撫でた。彼の喉仏

がごくっと上下する。わたしは微笑んだ。そして彼にゆっくりとキスした。彼の唇を押し開き、舌をもぐりこませて、彼のものとからみあった。会話するようにゆっくりなめあって、右手で彼の股間をまさぐった。かたい。わたしは一度顔を離して上気した彼の頬をぺろっとなめた。彼は笑った。その笑顔を見た途端、わたしのなかでカッとなにかが燃え上がった。服を脱いで、彼の服も脱がせた。ベッドに移動しながらキスし続けた。「耳をなめて、かんじるから」。彼の匂い。ほのかに花の匂いがした。それに汗がまじりあって、なんともかぐわしい。わたしの胸をもみしだきながら、神楽はわたしの名前を呼んだ。双葉。みんなはアビコと苗字のほうを呼ぶ。でも彼は双葉と呼んだ。双葉、双葉、双葉。神楽。わたしも呼んだ。わたしはすごく濡れていて、彼のかたいものを握ると自分の膣のなかに導いた。ずずっとそれははいった。うん、そう、ゆっくりいれていって。彼はわたしを強く抱いた。ゆっくり、さぐるようにしながら奥のほうまで彼がわたしのなかにはいってきた。うん、いいよ、神楽、すごくいい感じ。わたしは腰をゆっくり動かした。彼もその動きにあわせた。ああ、神楽、うん・・・・・・双葉、双葉、きみのなか、あったかい。馬乗りになって、彼の上でゆっくり動いた。彼の腰をまさぐり、彼はわたしの首筋から顎、耳をなめていった。耳はほんとにだめ。激しく動く腰を自分でとめることはできなかった。

新吾は浮気している。まあ、合コンばっかしてる男だから、いつかはって思ってたけど、やっぱりしてた。携帯電話のメールにばっちりその証拠があった。なになに。音大の声楽の子なのか。マミちゃんねえ。さぞやイク時いい声をだすんだろうな。

部屋の鍵を開ける音がして、わたしは携帯電話を新吾のリュックサックのなかに戻した。浮気してるやつがロックもかけずにケイタ

イ置きっぱなしにしてくってどうよ。ばかにも程がある。まあ、新吾はばかだしな。それにちゃらい。ナンパしてきたとき、すっごいちゃらかった。ちゃらいけれど話がおもしろかったし、かっこよかったから付き合ってみたけど、でもしょせんばかはばかだ。

「いか焼きそばなかった」

「あっそ」

彼はわたしの声のトーンにちょっとひっかかったようだった。

「どうかした？」

「別に」

バッグとダウンジャケットを抱えて腰をあげた。

「ちょっと呼び出されたから行くわ」

「え、まじ？」

「まじだよ」

舌打ちした新吾の頬をひっぱたいてやりたかった。おまえはただやりたいだけなんだろうよ。わたしも最初はそうだったけどでもなんか最近こいつの顔をみるだけでイライラする。てか、これでもわたしら付き合ってるっていえるんだろうか？

毎日のように神楽と会う。ほんの数分でもいいから会っている。ほんで毎日キスしている。公園の木陰で、闇夜に紛れた路上の片隅で、駅ビルのトイレで、わたしの部屋で、全身をからめあうようにして激しいキスをかわす。唇が切れるほど、キスをする。息があがるほど。お互いを飲み込んでしまいそうなほど。

「ねえ神楽、カコとはセックスできた？」

二回セックスしたあと彼の髪を指先でとかしながらたずねた。

「してない」

「一度も？」

「うん」

なんだろう。複雑な気持ち。ほっとしたような、不安なような。
「なんでしないの？」
「なんだかめんどくさくなった」
「へえ。で、わたしはめんどくさくないわけだ」
わたし軽いもんね。おそろしく軽い。紙風船みたいな女の子。
「別れようかとおもってる」
「え？　カコと？」
「うん」
「なんでよ。まさか罪悪感とか？　わたしとこんなことしてるから」
「違う。カコより双葉のほうが好きになった」
「よしてよ。神楽はわたしのことなんか好きじゃないよ。わたしが神楽の初めての女で、あんたはただわたしとのセックスにのぼせてるだけ。恋愛感情なんかじゃない」
神楽は黙り込んだ。
重ったるい空気は苦手だ。身を起こして服を着た。部屋を出てトイレに行って、キッチンで珈琲をいれた。リビングルームに行って、ソファで珈琲を飲んでいると母親がやってきた。
「あら、神楽君帰ったの？」
「いるよ、まだ」
「なんで双葉ちゃんひとりでこんなとこいるの」
「あいつ、漫画に夢中だから」
母親は変に耳障りな高い声で笑った。彼女はなにもかも知ってるんだろうなあとおもった。娘が昼間から男をひきいれてセックスしまくっているのを。それなのに平気な顔して下の部屋で韓国ドラマ見てる。なんか理解できないひとだ。
「神楽君に珈琲もっていってあげなさいよ」
「別にいいよ」
「わたしがいれてあげるから」
「勝手にすれば」
フフフフと笑う母親。薄気味悪いけれど、わたしはいつか母親

みたいになるのかもしれない。おなじ血が流れているのだから。彼女も若い頃はけっこう遊んだみたいだし。昔、母親の若い頃の写真を見つけたことがある。違う男と写った写真が十数枚はあった。母親は一体何者なのだろう。わたしがこんな風なのは、彼女の血のせいなのだろうか。

「はい、珈琲」

受け取って渋々立ち上がった。リビングルームを出るときに振り返ると、母親にはあのエビス顔でピースサインなんかしていた。

女ってめんどくさい。

生理痛で体育見学ってほんとダサい。それもカコとかぶるなんて笑えるよ、ほんと。

「ねえ、アビコ、何日目？」

「あー、わたしはまだ。生理前の生理痛なんだよ」

「そうなんだ。わたし二日目だからどぼどぼ出て大変なの」

「トイレいってナプキン替えてきたら？」

「まだへいき」

「そ」

バレーボールをしている級友たち。時々ボールがとんでくる。ごめーん。いいよーって笑いながらボールを投げ返す。もし当たってたらまじ腹痛くなるだろぼけが。てか、ボール投げかえしてめっちゃ痛いし腹。くそ。

「ねえ、アビコー」

「なに」

カコは膝を抱えて膝頭に顎をのせた。彼女がつけているボディクリームのきつい匂いがする。わたしは人工的な匂いが苦手だ。いい匂いだ、と感じる匂いは少ない。ふと神楽の匂いをおもいだして濡れた。

「避けられてるみたいなんだよね、わたし」
「ん？」
「瞬に」
「え。ああ、そうなの？」
早く体育終わらないかなー、てか、ほんと腹痛い。セデス飲んでこようかな。
「メールしても返事かえってくるの遅いし、電話には出てくれないし、デートはおろか、登下校も別々なんだよぉ」
「そうなんだぁ」
お尻をもぞもぞさせて体育館の出入り口のほうを見た。腰をあげようとしたとき、カコがわたしの腕をぎゅっと掴んだ。どきっとした。
「似てる」
「え？」
「瞬とアビコ似てる」
「え、なに言ってんの」
「いまのアビコみたいに上の空なんだよ、最近の瞬」
わたしはおなかをさすりながら作り笑いを浮かべた。
「あのさ、ちょっと痛み止め飲んでくるよ」
「ねえ、セックスって痛い？」
「え？」
「はじめてのときって痛いんでしょ？　すんなりうまくできるものなの？」
下腹部がきりきり痛む。なんでこんなに痛むんだよばかやろう。毎月毎月苦しめやがって。
「はじめてのときは痛いよ。でもそのうち痛みは消えてくから」
「きもちいい？」
「そうだね。きもちいいよ、セックスは」
「そうなんだ・・・・・・でもセックス嫌いな子もいるよね」
「ああ、まあね」

「ミカはあんま好きじゃないんだって」
「ふうん」
「わたしはどっちなんだろ」
しらんがな。
ためしてみれば？　そう言いかけてやめた。裸でからみあってる神楽とカコを想像したらおなかの痛みが増した。カコで神楽が感じるだろうか。
「痛み止め飲んでくるよ」
「瞬、経験ないとおもうから、うまくいかないんじゃないかな・・・・・・あ、わたしも未経験だから。恥ずかしながら」
ピー。
笛が鳴って、体育の先生が集合をかけた。やっと授業が終わった。わたしたちも腰をあげた。
「あ」とわたしは声をあげた。床に血がついていた。
「アビコ、きたんじゃん」
自分の足の間にあるのに、一瞬カコの血だとおもった。下腹部の痛みが消えていた。嘘のように。
「汚れたとこ洗いにいきなよ。先生にはわたしから言っとく」
カコは制服のポケットからポケットティッシュをとりだすと、ティッシュペーパーを唾でぬらして、床についたわたしの血を丁寧に拭きはじめた。

ダンス仲間のアーヤは同い年のバイセクシャルだ。背が百七十以上もあってモデル並のスタイル。顔立ちも端整だ。当然もてる。女からも男からも。
人通りの絶えた駅前広場で音楽にあわせて踊った。アーヤと一緒に踊るのは楽しい。寝たことはないし、この先もそうなることはないだろうけど、彼女とのセックスはたぶんとても気持ちいいだろう。

でもダンスしてるだけで十分気持ちいいから満足だ。
音楽を止めたアーヤが自動販売機のほうへ歩いていった。戻ってきた彼女はアクエリアスのペットボトルをわたしに放った。キャッチして礼を言う。いつもおごってくれる。彼女は缶コーヒー。ブラック。
ベンチに腰をおろして喉を潤した。ふと、彼女の右腕になにかはりついているのを見つけて指差した。
「それ、どしたの？」
アーヤは自分の腕をみおろして微笑んだ。
「エイズの検査してきたの」
「え？　まじ？」
「まじまじ」
彼女はふいにわたしの耳元に顔を近づけ、ぺろっと耳たぶをなめた。
「安心して。陰性だったから」
「なんで検査なんてしたの？」
「好きな子ができたんだ」
意外だった。アーヤは今まで特定の相手は作らなかったから。
「それって男？　女？」
たずねてから、ばかげた質問だったと後悔した。でも人間ができているアーヤは笑ってながしてくれた。
「本気で付き合おうとおもったから、その前に病気じゃないかどうか確かめようとおもって」
「へえ。検査って無料なの？」
「無料だよ。それにその日のうちに結果がわかるの」
アーヤは空に浮かぶ満月を見上げた。雲が多いのに、そこだけぽっかりひらいてひんやりとした黄金の光を放っている。
「でもさ、検査の結果を待ってる間ってのはきついよ。もし陽性だったらすべてががらっと変わっちゃうじゃん。自分が死ぬとか考えたのはじめてかも」

セックスして病気になって死ぬとかってどんなだろう。わたしは自分が注射をされることを考えるだけでぞっとした。アーヤは勇気がある。わたしはたったひとりでそんな検査を受けられる自信がない。

「怖がらせたとしたらごめん」

アーヤがわたしを肘でついた。わたしは首を横に振った。

「だいじょぶ。アーヤが病気とかじゃなくてよかった。その、好きな子とうまくいくといいね」

「ありがと」

セックスで死ぬのはいやだとおもった。ましてや新吾とのセックスで死ぬのはいやだ。絶対後悔するだろう。そうおもうと、もう二度とあいつとしたくないとおもった。

「ちょっとゴメン」

たぶん、前から心のどこかで考えてたんだ。わたしたち別れよう、と新吾にメールを打ちながらそのことに気づいた。送信し終えるとほっとした。

神楽のことをおもった。神楽がいなかったらこんな簡単に新吾を切り捨てることはなかっただろう。そう考えると、神楽は自分にとって特別な存在なのかもしれない。

「わたしも検査受けようかな」

呟くと、アーヤがわたしの顔をのぞきこんだ。

「やっぱり不安がらせちゃった？」

「違う。わたしもさ、相手のこととか考えちゃったりしたわけ」

そう。検査を受けるのは怖いけど、神楽に知らない間にうつしちゃったらそっちのほうが怖い。

「新吾のため？」

「あいつとは別れた」

「そうなんだ。じゃあ、新しい恋ってやつだね」

恋なんてピュアなもんじゃないよ。若干テンションが下がりながら苦笑いを浮かべた。

「ついていってあげるよ」
アーヤの有難い申し出にわたしは遠慮なく頷いた。

新吾はけっこうしつこかった。仕方ないから浮気してることを知っていると強気に出たら、そいつとはとっくに終わってるからと泣きついてきた。まじでうざいやつだ。何度も家にまで押しかけてきたのには正直閉口した。でも一度も会わなかった。エビス顔の母親に追い返してもらった。
「双葉ちゃん、わたしもあの子はなんか好きになれなかったの」
わたしだってそうだ。好きになったことなんて一度もない。
「双葉ちゃんは神楽君のことが好きなんでしょ？」
「好きじゃないよ。単なる友達」
「うそうそ」
エビス顔でにやにや笑う。
好きとかいう言葉は嫌いだ。好きってなんだ。わたしは誰のことも好きになったりしない。欲しいか欲しくないかどっちかだけだ。いるか、いらないか。するか、しないか。単純。ただの獣なのだ。わたしは。頭じゃなくて感じるだけ。使い古された言葉はいらない。形のない感覚がすべて。すべてなんだ。
「やばい」
神楽が部屋にはいってくるなりいつも以上に白い顔で言った。
「なにが」
「見られた」
「え？」
「菅井に見られた。今、双葉の家にはいるとこ」
わたしはベッドから身を起こして、じっと神楽のことを見つめた。動揺している彼をとりあえず落ち着かせないととおもった。
「菅井って菅井ミカ？」

「うん」
菅井ミカは同じクラスで、カコの友達だ。よりにもよってミカに見られるとは。あいつ暇人だから偶然神楽の姿を見つけてあとをつけてきたのかもしれない。だとしたらまじできもちの悪いやつだ。
ベッドから足をおろすと隣をぽんぽんと叩いた。神楽は背中を丸めてやってきておとなしく隣に座った。わたしは彼の手を握ってやった。わたしより大きくてあったかい手だ。わたしは親指で彼の手の甲を撫でた。
「まずいよね」
「まあ、どうにかなるでしょ」
神楽がうちの玄関の前に立ったときに、背後で写メを撮るときに流れる音が聞こえた。振り返ると携帯電話を突き出したミカが立っていたのだという。やつめ、証拠写真撮りやがった。どうせカコに送信するんだろう。てか今頃カコはその写真を見ているのかも。
「口裏あわせしとこうか」
神楽はわたしの手をもう片方の手でそっとおおった。わたしは彼の顔をのぞきこんだ。
「いいよ。本当のこと話す」
「とりあえず誤魔化せるかどうかやってみようよ。カコは本当のことなんて知りたくないかもよ。神楽に嘘をつき通して欲しいのかもしれないじゃん」
彼は黙り込んだ。
わたしは神楽の匂いを嗅いでいた。すー。はー。すー。はー。このいい匂い、もしかすると、嗅ぎおさめなのかも。
「これはおれたちの問題だから、おれがなんとかする」
「あ、そう」
そんな不安そうな顔して。やっぱカコが好きなんだな。あたしはあんたのためにエイズの検査までしたっていうのに。ま、そんなこと関係ないか。別にいいよ。帰りな、帰ればいいじゃん、カコの元に。てか、元からカコのものだけどな、神楽は。

「じゃ、帰る？」
すっかり縮み上がっているだろう神楽のあれのことを考えながらたずねた。彼がうなずくとなんだかやっぱりちょっと失望した。失望する権利なんてないのに。
「カコから連絡あるかもしれないし」
「そうだね」
「てか、おれからちゃんと彼女に説明しようとおもう。双葉には迷惑かけないようにするから」
「ちゃんと、ね・・・・・・」
神楽は生真面目に頷いた。おもわず笑いそうになった。だってこの状況、ダサすぎてウケルし。でもさすがにここで笑ったら神楽を傷つけるだろうとおもって、枕に突っ伏して「じゃあね、ばいばい」と言った。
「またね、双葉」
またね、という言葉にどこかですがる自分はあほらしいとおもうのだった。

翌朝の学校。
「おはよ、アビコ」
普通に挨拶してきたカコに正直ビビった。いきなりビンタとかそういうほうがわかりやすくていい。その日一日は別に何事もなくて、それから数日たってもカコもカコの友達もなにもしてこなかった。それがかえって不気味だった。だってそんなのカコらしくない。
神楽のせいだろうか？　あいつがうまく彼女に説明してちゃんちゃん一件落着したんだろうか。
それにしてもなんだろう。あのカコの落ち着き払った態度は。別になにもなかったかのようなそぶり。笑ったり喋ったり、ふつうのことがふつうにできて。逆にわたしのほうが萎縮しちゃって。なん

か調子でない。
　アビコにどうなってるのか聞きたいのだけれど、メールを送っても返信してこないし、電話をかけてもでない。学校ではさすがに声をかけられないし、登下校もカコがぴったり神楽に寄り添うようになったから完全に接触不可能。
　まあ、そういうことなんだよな。神楽はカコを選んだんだ。ま、そうだよな。
　なに期待してたんだか。ばかだな、わたし。心がすうすうする。あー、これが例のやつか。心に穴があいたようなとかいう。わたしのど真ん中にもぽっかりでかい穴があきましたとさ。神楽のあそこはけっこう立派だったーーーーって叫んでみるよ、その穴に、そしたら変だね、透明宇宙人に背中にチューブをぶすって刺されてずちゅずちゅわたしの性欲を抜き取られてしまいましとさ。いままでだったら男と切れたらすぐにアーヤに紹介してもらったりクラブ行って男物色したりしてたのに、今度はなんかそんな元気もでてこない。こんなの初めてだからどうしていいかわかんないし、めそめそ泣くわけにもいかないし。
　良く晴れた日曜の昼下がりにベッドに横になって安室のニューアルバム聴いてぼんやりしていたわたしはぼんやり神楽とのセックスの思い出にひたっていた。すると、こんこんと扉がノックされて呑気な母親の声がした。「カコちゃん遊びに来てくれたわよ」どがーん。この部屋は爆撃されました。
　え、とか、待って、とか言う前に扉は開いちゃってて、そこにカコが立っていた。カコはピンク色に黒いドットのワンピを着ていて、メイクもしっかりきめている。小さめのパープルのバッグを肩から腕にかけかえて「お邪魔するね」と言った。真顔だ。わたしは上下だるだるのスウェットで髪はぼさぼさ、ひどい姿でごめんなすってまじ迷惑だし急にこられてもアレだからってでもこんなわたしの状態はどうでもよいらしく彼女は扉を静に閉めると部屋のなかにすたすた入ってきてわたしの勉強机の椅子に腰をおろした。

起き上がるのもなんかだるくて、寝たまますらりとしたカコの足を眺めているとその足はなんだかなまめかしく見えるのだった。ハイソックスじゃなくてストッキングをはいているからだろうか。
「あんたの男と寝たから」
カコは膝の上においたバッグを指先でとんとんとやりながら言った。
え？　とわたし。わたしに男はもういないが。
カコはわたしの反応をうかがうように目の中をのぞきこんできた。それからちょっと困惑したように、「大学生の」と言った。
「新吾？」
「そう」
新吾はもうわたしの男ではないんだが。でもそんなことどうでもよくて、なんでカコがあいつと寝たんだ。
「ミカが」
またミカかよ。ミカがどうした。
「アビコの家の前にいた新吾さんに声をかけたの」
うはあ。ミカのやつ、うちの前はってたのか。探偵かよ、あいつは。てか、そうするように命令したのはカコか。こわ。
「で、わたしちょっと新吾さんと話がしたいとおもって会いにいったの。で・・・・・・してみたの」
見境ないあいつはやっぱ犬だな。まあどうでもいいけど。でも神楽のことを好きなカコがなんであんなカスと寝るんだ？　身を起こすと、カコもすくっと立ち上がった。彼女はぎらぎらする目つきでわたしを見つめていた。口元には笑みが広がっていた。
「お礼言うねアビコ。あなたが瞬を男にしてくれたからわたしたちはセックスできたんだもん。わたしも優しく新吾さんにセックスの仕方を教えてもらったおかげでセックスに対する恐怖心を消すことができた。別にこれで問題ないよね？　おあいこだもんね？」
カコはひとり頷いた。
「じゃあ、これでもうこのことは終わりね。わたしはこれから瞬と

デートだから。また明日学校で。ばい、アビコ」
階段をおりていく足音、それから玄関扉が閉まる音を聞いてから神楽に電話した。でもやっぱりでやしない。ばかみたいに何度も電話をかけ続けた。コール音にむかって口汚く罵ってからベッドに突っ伏した。くそ。頭痛い。部屋からのろのろ出て風邪薬を飲んできた。しばらくして睡魔が襲ってきた。毛布にくるまって意識を失って気づいたら耳元で安室ちゃんがバラードを歌っていた。わたしは携帯電話をひらいてもしもしとつぶやいた。頭痛は消えていた。
「あ、おれ、神楽」
「・・・・・・」
窓を見ると夕日で赤く染まっている。カコとのデートは終わったのかな。
「電話くれたよね」
「ああ・・・・・・うん」
「どうかした？」
言葉に詰まる。神楽になにを言いたかったのかがわからない。いや、言いたいことはいっぱいあるはずだ。でも忘れてしまった。
「双葉？」
「あんたさ、わたしのこと避けてたでしょ。まあ、しつこいわたしもどうかとおもうけど、はっきり言ってよ。わたしたちはもう終わったってさ」
沈黙する電話の向こう側。なんだよ。ひとを傷つけるのが怖いのか？　傷つけてそんな自分に傷つくのが怖いのか。じゃあいいよ。わたしが言うよ。
「じゃあ終わりね、もうこれで」
なんかあたまんなかがぐちゃぐちゃだ。胃も変だ。でもたぶんこれでいいんだろう。ばいばい、神楽。
電話を切りかけたとき、神楽の声が聞こえた。
「さっき、話してきた。カコと、ちゃんと」
壁にしみがついている。輪郭だけの丸いしみが。

「ちゃんと話した」
気持ちの悪いしみだ。
「ねえ、双葉」
「なんだよ」
「これから家に行ってもいい？」
一拍おいて、胸にどふっとぬくい水を注ぎ込まれたみたいな感じがした。
「あのさ、カコとしたんでしょ」
「あ、聞いた？」
「うん」
「したけど、なんか違った。双葉とするのとは違った」
「どんなふうに？」
「わかんないけど」
「そっか」
口元がゆるんだ。嬉しがるな、わたし。
「双葉とやりたいよ」
「わたしも。神楽とやりたい」
「じゃ、これから行くね」
「うん」
神楽がこれからわたしとやりに来るとおもうと、俄然元気が出てきた。ベッドを飛びおりてぴょんぴょんジャンプしたら下からエビス顔の母親がなにか叫ぶ声が聞こえた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6175q/

アビコとかいう子

2011年5月11日19時40分発行